

2020 年 7 月 19 日（日）「動物か、神のかたちか」

《聖書協会共同訳》 コヘレトの言葉 3:16-22

16 太陽の下、さらに私は見た。裁きの場には不正があり、正義の場には悪がある。

17 私は心の中で言った。「神は正しき者も悪しき者も裁かれる。天の下では、すべての出来事に、すべての業に時がある。」

18 私は人の子らについて心の中で言った。「神は彼らを吟味し、動物にすぎないことを見極めようとする。」

19 人の子らの運命と動物の運命は同じであり、これが死ねば、あれも死ぬ。両者にあるのは同じ息である。人が動物にまさるところはない。すべては空である。

20 すべては同じ場所に行く。すべては塵から成り、すべては塵に帰る。

21 人の子らの息が上へ昇り、動物の息が地に降ると誰が知るだろうか。

22 私は見極めた。人は自分の業を楽しむ以外に幸せはないと。それがその人の受ける分なのだから。彼の後に起こることを、一体誰が彼に見せることができようか。

《新改訳 2017》 伝道者の書 3:16-22

16 私はさらに日の下で、さばきの場に不正があり、正義の場に不正があるのを見た。

17 私は心の中で言った。「神は正しい人も悪しき者もさばく。そこでは、すべての営みとすべてのわざに、時があるからだ。」

18 私は心の中で人の子らについて言った。「神は彼らを試みて、自分たちが獣にすぎないことを、彼らが気づくようにされたのだ。」

19 なぜなら、人の子の結末と獣の結末は同じ結末だからだ。これも死ねば、あれも死に、両方とも同じ息を持つ。それでは、人は獣にまざっているのか。まさってはいない。すべては空しいからだ。

20 すべては同じ所に行く。すべてのものは土のちりから出て、すべてのものは土のちりに帰る。

21 だれが知っているだろうか。人の子らの霊は上に昇り、獣の霊は地の下に降りて行くのを。

22 私は見た。人が自分のわざを楽しむことにまさる幸いはないことを。それが人の受ける分であるからだ。だれが、これから後に起こることを人に見せてくれるだろうか。

【序論】

人間は死後どのような状態になるのか。コヘレトはそのことをどのように理解しているのか。この認識こそが、今日の箇所を理解していくうえでの鍵となるでしょう。死後の問題というのは、まさしく「宗教」の専門分野です。しかし、キリスト教を含め如何なる宗教も、「死後の状態」を現世の人に証明することはできません。聖書も新天新地

や地獄について教えてはいますが、誰もそれを現在生きている人に見せて差し上げることはできないのです。それゆえ、本当にそのような死後の世界が存在するのか、それを信じるかどうかは、各々の信仰に関わる部分となってくるでしょう。コヘレト自身も、一つの人間観をもって今日の箇所を記していますが、人間の死後の行き先については不明瞭な描き方をしています。そして、その不明瞭さこそがほとんどの人間の感覚であり、同時に人間の考え方や生き方を左右する部分となるのです。

【本論】

今日の箇所をコヘレトの死生観に照らして見ていきますと、次のような構造になっていることが分かります。

- ①法廷は現世だけのものなのか（16-17 節）
- ②人は（現世だけを生きる）一種の動物に過ぎないのか（18-21 節）
- ③人は現世を満喫すればよいのか（22 節）

本論 1. 法廷は現世だけのものなのか

太陽の下、さらに私は見た。裁きの場には不正があり、正義の場には悪がある。（3:16）
再び「太陽の下」という表現が出てまいりました。繰り返しお伝えしておりますように、この言葉には「神なしに無機質に回っている世界」「延々と同じ作業を繰り返す世界」というイメージが置かれており、その世界観に立つならば、そのような世界に生まれてくる人の人生も「無意味」ということになります。そして、今日はその世界で行なわれている「裁判」の空しさが訴えられる。人は正義が貫かれることを願って裁判所に訴えますが、そこで行なわれている裁判の多くに不正が入り込んでいるからです。「**裁きの場**」「**正義の場**」と、言葉の使い分けがありますが、基本的には同じ事柄の言い換えで、いずれも「法廷」を意味します。ただ、後者の方が「法廷という場所では正しい裁きがなされなければならない」というコヘレトの主張が込められているようです。無罪は無罪、有罪は有罪でなくてはならない。ところが、裁判の現場では、冤罪があったり、有罪の者が無罪放免になったり、賄賂によって操作されていたり…そういうことが起きているというのです。

中世ヨーロッパで起きた魔女裁判では、悪魔と契約を交わしてキリスト教社会の破壊を企む背教者として「魔女」と見なされた多くの人が処刑されました。おそらく、その多くは正当性のない裁判によるものだったと思われます。このような現象は、中世ヨー

ロッパのみならず、紀元前4世紀にも疫病の蔓延のときに妖術を疑われた170人が処刑されたり、紀元前2世紀にも数千人規模の人々が同様の容疑で処刑されたという事件が起きたそうです。これは社会不安の高まりがパニックを引き起こしたことによるものと分析されています。現代でも、形は違えど同質の問題が「裁き」の現場を占めています。それは、何も法廷だけのことではありません。嘘の情報がネット上で広まって炎上したり、公文書改竄に関与させられて追い詰められた人が自殺に追いやられたり。誰かの立場を守るために、事件の真相がひた隠しにされ続けているものも多くあるでしょう。人間世界は真実と虚偽が同居しており、見分けるのが難しいのが実情です。まさしく罪の現実であります。真実を真実としないところには、人間の尊厳の欠如の問題があるでしょう。人はなぜ嘘をつくのか。そのほとんどは自己保身から来るものでしょう。自分の汚れた部分を見られたくないのが人間の本質であり、それを隠すために嘘をついてしまうのです。しかし、嘘をつくことによって表面上は綺麗に見えても、隠された虚偽は人間社会を内側から蝕み、嘘をつき続ける人自身の人間としての尊厳をも奪っていきます。

私は心の中で言った。「神は正しき者も悪しき者も裁かれる。天の下では、すべての出来事に、すべての業に時がある。」(3:17)

コヘレトは現実世界の法廷に幻滅を覚えながら、ふと天に目を上げました。たとえ今は不正な者が笑っていたとしても、定めの時が来ればすべてのことが正しく裁かれる。神はその時を決めておられる。神の裁きは表面的なものではなく、人間の行ないと動機が徹底的に調べられる。その法廷には「**正しき者**」も「**悪しき者**」も立たされる。多くの人は、法廷とは現世だけのものと思っているが、そうではない。最終的には大小すべてのこの世の法廷(あなたの心の法廷に至るまで)が神の御前に立たされることになるのだ。死後、自分の身に起きることを甘く見てはならない。

本論2. 人は(現世だけを生きる)一種の動物に過ぎないのか

私は人の子らについて心の中で言った。「神は彼らを吟味し、動物にすぎないことを見極めようとする。」人の子らの運命と動物の運命は同じであり、これが死ねば、あれも死ぬ。両者にあるのは同じ息である。人が動物にまさるところはない。すべては空である。

(3:18-19)

不正なる裁きに支配された世を非難するコヘレトの思いは、人間を動物の一種としてしか見られないところにまで下っていきます。真実を語り、真実に生きられないのであれば、それはもはや獣と変わらないではないか。いや、獣でさえそんな悪いことはしない。嘘をつく人間とは獣以下ではないか! そうコヘレトは言うのです。

少し視点を変えて、人間を生物学的に見たときに他の動物と違いがあるのかどうかを考えてみましょう。ゲノム解析で世界的な学者であるフランシス・コリンズは、2008年に日本でも翻訳出版された『ゲノムと聖書』の中で次のように言っています。

「複数のゲノムを調査した結果、ヒトのDNA配列を他の生物のそれと詳細に比較できることがわかった。コンピュータを用いてヒトのDNAの特定の部位を選び出し、他の種にこれと類似した塩基配列（※いわゆる遺伝情報）がないか判断することができるのである。ヒトの遺伝子のコード領域（つまり、タンパク質に関する指示が含まれている部分）を取り出し、それを用いて探索すれば、他の哺乳類のゲノムにも、非常によく似た部分を必ずと言っていいほど見つけることができる。」（p. 122）

この本の表によると、「ヒトのDNA配列と比較して、他の生物のゲノムにおいて同様のDNA配列が発見される尤度（※いわゆる確率）」は、マウスや犬とは99%の一致、チンパンジーとは何と100%の一致が見られることが分かります（p. 123）。つまり、生物学的にはヒトは他の動物と大差ない存在であるということになります。コヘレトが数千年前にここまでの見識をもって、「人間は一種の動物にすぎない」と言ったかどうかは別として、人間もまたある一点においては他の動物と変わらないと理解していたことには真理があるでしょう。それは、命を受け、やがて死んでいく存在であるということです。「**人の子らの運命と動物の運命は同じ**」という表現がありますが、それは最終的な「死」の状態のことが言われています。「**両者にあるのは同じ息**」というのも真実であり、動物も人間も等しく息絶えるのです。

私がしばらく前にかかっていた皮膚科では、初診のときに医師がこのように言ったのが印象的でした。「お風呂に入る回数と時間を減らしなさい。自分を一匹の動物だと考えてみてごらん。動物はそんなにお風呂に入らないでしょう。この地球上でこんなにも清潔にこだわってお風呂に入るのは人間だけなんですよ。肌荒れの主な原因は実はここにあるんです。」言われてみれば確かにそうかもしれないなと思いました。人間もまた細胞レベルで考えれば、他の動物と何ら変わることはない。

すべては同じ場所に行く。すべては塵から成り、すべては塵に帰る。（3:20）

「塵から成る」「塵に帰る」という表現は、創世記 3:19 で神がアダムに対して言われた言葉を思い起こさせます。「**土から取られたあなたは土に帰るまで、額に汗して糧を得る。あなたは塵だから、塵に帰る。**」私たち人間は、（無機質な言い方ですが）死ぬと息を失い、命なき「肉」となり、やがて腐敗していきます。腐敗を避けるために火葬する。この現象は、細胞を持つ他のあらゆる生物と同じです。ヒトもまた「星の屑（塵）」に戻るのです。素材としては、地球という惑星で誕生した一個の生命体に過ぎないのであります。

本論 3. 人は現世を満喫すればよいのか（死後の世界を信じないなら）

人の子らの息が上へ昇り、動物の息が地に降ると誰が知るだろうか。（3:21）

コヘレトは人間を動物にまさることのない存在だと説明しながら、所々で不思議な区別を設けています。ここでは、人間と動物の死後の行き先が違うということ、ぼんやりと描いているようです。「上へ昇る」とは、人間の命が死後、神によって取り扱われるということ、神の主権の下で裁かれることを意味するでしょう。「地に降る」とは、意味が不明瞭ではありますが、命そのものの有効性が失われる、その後の状態がないということが言われているようです。ここには、人間と動物との間の明らかな取り扱いの違いがあります。コヘレトは読者を創世記 1～2 章の人間創造の記事に立ち返らせようとしているのです。

- ・ 神は人を自分のかたちに創造された。神のかたちにこれを創造し、男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて、これを従わせよ。海の魚、空の鳥、地を這うあらゆる生き物を治めよ。」（創世記 1:27-28）
- ・ 神である主は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして生きる者となった。（創世記 2:7）

命ある存在となったときに神から直接「その鼻に命の息を吹き込まれた」と言われているのは人間だけです。この「息」（ルアハ）とは「靈魂」と言い換えてもよいでしょう。人間は霊的存在として、神とコミュニケーションを取り、交わるべきものとされたのです。言語によって神の考えを知り、ただ本能のままに生きるのではなく、理性をもって秩序を整えるべきものとされた。そのことは、「治めよ」という命令に表されているように、社会を築き、人と人が契約を結び、真実を行ない、愛し合うべき存在とされたということです。神が人間に求める世界がある。しかし、人間はその神の御旨に従わず、最も正義と公義が求められる裁判の場で不正が行なわれているのです。この、「尊い存在として造られた人間」と「獣にも劣る混沌をもたらしている人間」の著しい対比があります。

私は見極めた。人は自分の業を楽しむ以外に幸せはないと。それがその人の受ける分なのだから。彼の後に起こることを、一体誰が彼に見せることができようか。（3:22）

この結論の背後にも、いつものように暗黙の条件が隠されています。それは、「もし人が神なしに生きるなら」「永遠がないなら」「神の裁きがないなら」という前提です。そんなものがないのであれば、人は現世を楽しむ以外にないではないか。いや、楽しまいと損ではないか。生まれ、暫し生き、朽ち果てていくだけの存在であるなら、せめてその時間だけでもいい思いをするのが得策ではないか。

【結論】

もちろんコヘレトは、このような諦めの境地に生きることを読者に薦めているわけではありません。彼が求めているのは「法廷における正義」であり、人間が本来あるべき「管理者」として地を治めることであり、神との特別な関係の中で永遠に生きることです。生物学的には動物と何ら変わらない存在でありながら、「神のかたち」としての尊厳を持ち、それゆえの威厳を湛えた存在であることを思い起こさせようとしているのです。だからこそ、人は正しく生きなくてはならない。神の御心に適う生き方へと導かれるためには、神によって贖われる必要があります。罪のうちに歩み続けることがないためには、キリストによって光とされなくてはなりません。聖霊によって造り変えられ、永遠のいのちを受けることによってこそ、本来の人間の姿を取り戻していくことができるのです。

【祈り】

人間を特別な寵愛の下に創造してくださった天の父なる神様。私たち人間には、その立場ゆえの地に対する責任があります。しかし、罪を持つ存在であるがゆえに、生まれつき義を行なうことのできない者たちです。神のかたちとして創造されているが、神の御旨を実現できないのです。主よ、私たちを憐れみ、キリストの義に生きる者とさせてください。私たちの生き方からあらゆる不正を取り除き、人生のあらゆる局面で嘘偽りなく生きられるよう、助けてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
ヒトを、生物学的には他の動物とのつながりを持つ存在としながら、「神のかたち」という特別な属性を与え給うた、父なる神の愛、
罪ゆえに失われた「神のかたち」を、ご自身の義によって取り戻させ給う、主イエス・キリストの恵み、
すべての生活の営みに、正義と公正を実現させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。